岐阜縣林報

大正十年二月廿五日　第百三十六號　毎月廿五日定期發行　（明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可）

目次

□神宮式年御造營材に就て
□簡便害虫研究法
□農家の空地利用に就て
□森林と養蜂（續き）
□若き日の思ひ出
□金華山に登りて
□紅玉の悲しみ
□學校通信
□會員異動
□急告
□編輯室より
□長野縣木曾山林學校入學者の爲に
□入學のすゝめ
□廿週年記念主意書

神宮式年御造營材に就て

以下誌す所は管理局殊に木曾在勤の諸君は熟知なれど他大方の諸君に少しく紙面を割かれんことを切望す

寛正の正遷宮以後は正遷宮の式を擧げることと能はず仮殿遷宮のみを行ひしが後二百十余年を經て天正年中織田豊臣二氏等資財を獻ずるありて天正七年初めて田立山より御造營材を伐出し以來今日に至る二十年毎に七百余年の間此の木曾より御造營材は伐出せられつゝあるなり

次期大正十八年御造營に係る御用材伐出に就き大正七年春内務省より宮内省へ照會あり大正八年より實地調査等に着手す然して御用材中大中小材は大正十年六月迄で修繕部用材は大正十三年十月迄でに熱田或は桑名に於て宮内省より内務省へ引渡すことゝなり居れり

御用材の種類

御用材の種類は大別して左の三種とす

大材
中小材
修繕部用材

大材は末口直徑一尺五寸以上のものを云ひ直徑の大なるものにありては實に四尺二寸長さの大なるものは四十三尺なるあり

中小材は末口直徑一尺五寸以下のものを云ふ

修繕部用材は神宮附屬建物修繕用材にして末口直徑は自一尺至二尺六寸長さは自六尺五寸至三十三尺八寸

大中小材の用途は次の如し

甲　殿内所要材　ウナ。ヤナ
乙　造替部所要材　ウ。ヤ
丙　殿内豫備材　ナヨ
丁　造替部豫備材　ヨ

前記片仮名は所用切判にしてウは宇治の頭字にして内宮卽ち皇大神宮用にしてナを加ふれば皇大神宮内殿用を意味す。ヤは山田の頭字にして外宮卽ち豊受大神宮用にしてヨは豫備材の義なり

木曾支局管内各出張所に於ける伐出擔當御用材種別本數材積は左記の通りなり

出張所名	區劃班數	種別	本數	材積
王瀧	四五	大材	三八〇	一、四〇四、七七
（一區劃班の面積約三十町歩）		中小材	一四〇	四〇八、八二
		修繕材	八一〇	二、三〇五、八六
		道具木	七、九六五	一〇、〇〇六、三二
		神宮材	一、三三〇	四、一一九、四五
計				
上松	三九	道具木	七、九六五	一〇、〇〇六、三二
		大材	二九四	八一九、九六
		中小材	七、三六七	一五、一一〇、五五
		道具木	約三六、八三五	一五、一、二三七、三五
		神宮材	七、六六一	一五、九三〇、五一
		道具木	三六、八三五	一五一、二三七、三五
計				
野尻	三六	大材	三〇八	一、三八四、七一
		中小材	一三三	六一九、七九

修繕材	三三四	一、〇一五、五五	
道具木	三、七九五	五、八二一、九一	
神宮材	六六五	三、〇一〇、〇五	
計			
道具木	三、七五	五、八二一、九一	
大　材	一三三	四八〇、八九	
道具木	七三三	約一、二九九、〇九	
神宮材	一三三	四八〇、八九	
計			
道具木	七九三	一、二九九、〇九	
大　材	一二三	九六六、七三	
中小材	三七)	一、四〇五、八九	
修繕材	三二	一、二九九、七一	
道具木	三、八〇五	六、一〇六、三一	
神宮材	九四四	三、六七二、三三	
計			
道具木	三、八〇五	六、一〇六、三一	
大　材	六五	二四四、五七	
修繕材	一	二、五三	
道具木	六〇七	六〇五、七三	
神宮材	六六	二四七、一〇	
道具木	六〇七	六〇五、七三	
神宮材	一〇、七四九	二七、四七〇、三三	
合計			
道具木	五三、八〇〇	一七五、〇六六、七二	

名古屋支局付知出張所伐出擔當御用材種別本數左の如し

付知

大　材	三七二	一、三六七、六五	
修繕材	三七一	二、四五九、二二	
計			
神宮材	七四三	六、三三六、八七	

原木調査

原木は名古屋支局管内付知出張所及木曾支局管内上松出張所臺ヶ峯事業區は神宮備林或は臨時神官備林にして他出張所伐出の分は全部備林以外のヶ所とす

原木調査は實に困難なる事業にして前掲各一區劃班の面積を大約卅町歩とするも奮く可き噴汎たを地域となり加ふるに小徑すら無く丈余なる態笹繁茂し身の自由すら得る能はず加之原木は長尺大にして且つ撓れ曲り大節等あるものは之を取らず此の如き狀態なれば掛員一人々夫一乃至二人にて猛態の猛烈さにて調査するも一日僅々一、二本を得るのみの事あり合格木決定の上は白ペンキを以て調査番號を樹皮の上より記入し野帳には調査番號胸高直徑品位長さの等級適用御用材番號を記入す夜は各調査班の打合せにて十時或は十一時を過ぐること稀ならず

伐木

伐木は杣代人一人杣夫三乃至五人を一組とし元切は必ず三ツロとす伐倒後直ちに剝皮しラープにて長さを取り末口最小直徑品位等を檢するものなれど伐倒剝皮後は中々に故障現れ四方明(無節)の如きは簞節をも不合格とする故合格するもの甚だ少し是が爲めに代り木を再調査せざる可からず當初に於てすら原木課査に困難したるなれば其の附近に於て伐り木を調査する如きは一層の困難を感するところなり

伐倒檢査濟となれば正尺の元口及末口に切判鑿を以て環線を入れ(此の点普通伐木造材の時と大に相違す)末口環線外に鍵を卷き目戸穴を穿ち鍵卷代は五寸目戸穴伐は末徑二尺以上のものは一尺五寸其の他は一尺を標準として余尺を取る貴重材等は元口にも鍵を卷き或は目戸穴を穿ち

ク大一　上　〇一二五　へ

の如き切判を切判鑿を以て彫刻すクは宮内省を大一は大神宮を上の部は各出張所の符號〇は前掲所要ヶ所數字は所要名稱の番號へは年度切判を現すものとす、御用材の梢は普通材の造材寸法となし(普通多くは二間材十五尺五寸とす)障碍木等と合して道具木と爲す厘代は殆ど全部抱拂にして一本の御用材を造材するに平均二乃至三工を要したるが如し

運搬

平坦地の山落は大部分木馬運搬なれど御用材には鍵を打つこと不能なれば(深さ一寸迄では差支なきも眞の直材少なき爲鍵を打つことは不合格たらしむる虞あり)一本の木材をも一々麻綱にて結束する爲め手數多く殊に手鍵を打ち得ざりし爲め麻綱と枝條を以て代用品を作り是を適當なるヶ所に卷付くる等は大に功程に影響せり、木馬曳と其の大部分は抱拂なりき

上松出張所に於ては集材にスキッダー(集材機)を使用せり

木馬運搬不能の傾斜地に到れば御用材は一

本宛十乃至二十貫綱を以て吊リソロバン上或は直接地上を滑送せしむるも木材の重量非常に大なれば慣重なる態度にて作業を爲すも屢々麻綱切斷し或は種々の障碍を惹起し危險少なからず

小谷狩は普通と大差なきも鍵を自由に打ち込み得ざると重量大なる爲めヤ「ナ」口を引き出すに大に困難す又流材を防止せんが爲め或る距離を隔て流材の虞なきヶ所へ一々御用材の本部を積み上げ再び適當の時機に送材することは掛員諸氏の大に頭腦を費しつゝある所なり

小谷狩以下は馬車或は瀧車に依り熱田及桑名へ輸送するものとす

御神木送りのこと

御神木中内宮御樋代木は末口直徑一尺五寸長十八尺下宮御樋代木は末口直徑一尺七寸長十八尺の何れも四方明にして南面したる山地に生立せるとのを上杉出張所臺ヶ峯事業區字折越に於て撰木せられ大正九年六月三日神宮支廳より神宮出張木本祭を擧行せられ此の御神木と別に御祝木四本(内一本は末口直徑一尺六寸内三本は末口直徑一尺五寸長何れも十八尺の四方明)と共に大正十年一月五日瀧車にて中央線上松驛より坂下驛迄で輸送せられ坂下より古式により大河狩を爲し付知出張所伐出材御扉木(末口直徑四尺二寸長一丈)等と合して錦織に到り其より筏に組み二月中旬四迄でに熱田へ到着の豫定と聞き及ぶ

簡便害虫研究法

菊池　一

降る雪に木曾路も美しくなりました。スロープを眞紅にしながら硝子越しに駒ヶ岳の崇高な姿を眺める氣分は何とも云はれぬ。諸先生方からは度々御名吟を聞かされるが歌讀む術を知らぬ私は何時もストーブに投げこむ薪を弄くつて居ます。所でこの薪には大小輕重、色々ある事は無論であるか赤松が一番多い。中には薪としては價値の疑はれるのさいある。腐蝕しきつて火になれさうもないのがある。一体木材の腐蝕は吾等に取つては重大なる問題であるのだが理化學的にもよく研究されて居るや否や。菌類や昆虫にも密接の關係があるらしい。先年「森林と菌類との關係」の研究に付ては安田篤先生が文部省から奬勵金を得て居られる樣だが發表下ださつたら非常に有益だらうと思ふ。兎に角、明に菌類の跋扈は私等の眼にもわかる。試に薪材を破つて見たら中にキクヒムシの幼虫が幾匹か居た。是は而白いぞと今度は表皮を剝ぐと多數の昆虫の幼虫を發見することを得た。二三分の大きさの物から五六分位の物も居る。種類も種々で名稱は目下調べ中。赤松には尤も多くゴンゼツ等にも居た。抑も穿孔虫類の生活狀態は未だ充分に研究されて居らぬらしい。幼虫の生活は樹皮の下に於てするものと材質の内部にて營まれる物と區分する事が出來るか前者は主として樹木の形成層に從がつて穿孔する。而してこゝは養分の最も豊富な所だから幼虫が盛に食害するのも無理がない。

穿孔の模樣は虫類に依りて大凡う一定してるから其形狀で幼虫の名がわかる筈である材部と皮部とに共に穿かれる物では單縱孔復縱孔、復横孔、放射孔又は梯子孔等の別がある、木曾の此頃は零下十度内外であるこの寒さに皮一枚下に幼虫の生きてるのには全く驚かざるを得ない。自分は虫を採つては瓶に保存なし、薪は標本參考品として陳列を始めてる。何しろ參考書がどつさりあるのではなし。充二分の道具建も出來はせず纏まつた論文も出來やう筈はない。さりとて何かやらぬわけにも行かぬ。貧弱な材料でも積もれば山になるのであらう。早晩物にならぬこともあるまい。一匹の虫の事一本の薪も標本となれば自己創造の一部だ。

先きに森林と害虫其一を書いて見たが愚圖〳〵してる間に秋が來、冬となり、盛に活動して居た昆虫連は影も姿も無くなつて仕舞うた。森林對害虫の如き大問題は短日月でろくな結果も得られやう筈はない。しかし吾々にとつては重大な肝要な事件ではあるまいか。長い寒い冬は訪れた。金がない。本がない。遊びに行く所がないといふ諸君があつたら禁火に暖たゝまり乍ら私の樣に虫を採集してくれ給へ。液漬にするならばホルマリン五%又はアルコール七〇%

に入れるがよい。穿孔の模様は寫生するのも一興、木の名は忘れずに附けて置くこと若し又虫喰標本品を送付して下されば、その位生徒諸君を益することでせう。斯くして冬にも害虫を簡單に研究し得ると云ふ

木曾植物目録（ツヾキ）

石南科　チヂキ、フ、ジノ類、サツキ
龍膽科　コケリンダウ、クウヤク、アサヾ、リンダウ
豆　科　カスマグサ、ウマゴヤシ、ミヤコグサ、ニハフヂ、イニシダ、ノサ、ゲ、クヅ、フタバハキ、ハギ
茜草科　ヤヘムグラ、キヌタサウ、ヤヘムグラ、ヨツバムグラ、ヘクソカヅラ、フタバムグラ
天南星科　テンナンセウ、カラスビシヤク
繖形科　ヤブニンジン、ウマノミツバ、ヤマゼリ、ノダケ
小蘗科　イカリサウ
桑　科　カウゾ、クワクサ、カラハナサウ、カナムグラ
漆　科　ハゼ
省活泊科　ヨバツウツギ、ミツバウツギ
蘭　科　チドリサウ、チヂハナ
玄參科　ヒヨクサウ、クカイサウ、ニロカグサ、ハンカイアザミ、サデグサ、シホガマキク、コシホガマギク
衛矛科　ニシキヾ、サワダツ、ヒロバノツリバナ
山茱萸科　ヤマバウシ
睡蓮科　カワホヂ
鳶尾科　アヤメ、シヨウブ
薯蕷科　ヤマノイモ

（未完）

農家の空地利用に就て

西澤生

農家の繁榮を計るについては、種々なる方法ありと雖も、我國の農家の如き所有地少なき所に於ては、土地の利用を遺憾なく行ひ、少なき土地より多くの生産物を收むる事に務め、更に進んで空地を開拓利用する事肝要なり。近時農家が此等の事に次第に心付きて或は深耕を行ひて、可成多くの收獲物を得んとし、又原野荒蕪地を開拓に務め、或は山間の荒蕪地を變じて畑地となすが如き、或は山腹の傾斜地を利用して果樹、二亞等を植ゆるが如き種々雜多の方面に向つて土地を利用し生産物を收むるに至りたるは、實に實業界の爲に頗る喜ぶべき現象なりと云ふべし。斯く外部に向つては土地の利用を遺憾なく行ひつゝあれども、今一歩退きて自家の屋敷内を見んか、草は茫々と繁茂し、塵埃は高く積りて、不生産的に放棄せられつゝある土地あらん、否農家には斯くの如き土地が必ず存すると斷言して憚からざるなり。改に余は斯る屋敷内にある不生産的の土地をも遺憾なく利用されん事を希望すると共に、農家たるもの、先づ最初に利用すべき土地ならんと信じて疑はざる所なり。

然るに此土地を利用する事なく依然放棄し置かんか、高き租税を出して其の土地より何等かの生産物を收めざるに至ては其の損失莫大なりしのみならず、其の附近は不潔となり、從つて種々なる病源は此れより起り、又は傳染病の蔓延を容易ならしむる等其の損失又前者に劣らざるなり、斯く大なる損失あるものなれば一時たりとも忽がせにすべからざる事明かなり。反對に此れを利用せば唯に損失を免れ生産物を收むるの利あるのみならず、美感を添ふるの利あり。「居は氣を移す」と古人の言はれたるが如く農家の人が終日田畑に出で、汗を流して歸るや我が家庭が如何に清潔にして、種々なる百草の花、果樹の實、苗木の綠、桐樹の陰等の目に入りたらんには、一日の勞働も此に慰藉し得べし。此に於てか家を思ひ家を愛するの念生ぜずんばあるべからず

然らば此れを如何に利用すべきか、種々の方法はあれども先づ荒蕪地を起して直に桃花梨桃等の果樹を植ゆるも良からん或は蔬菜を作り或は苗木を培養し、又周圍の垣根の如き處には杉、扁柏、桐、三亞等を植付くるときは所謂一舉兩得なり。其他利用すべき方法は種々あれども、其の志さへあらば、如何にも自ら工夫し得ることなれば先づ農家は此点を利用して利益を收むるに心懸けざるべからず、然るときは此の利益は一家に於ては左程大ならずと雖も此れを郡縣國と及ぼしならんには實に莫大なる金高に上るべし、近時農家が盛んに生活難を訴ふれども此等の微細なる点までも注意せば其の他にも又斯くの如く利用すべきものは種々あるべし、故に此れを利用して以つて、各方面より利益を收むることに心懸くれば、現時一般社會が如何に生活難に苦むと雖も、此の確實安全なる農家に於ては、生活に困窮するが如きことは決してあり得べからざるなり。斯の如く農家の經濟上及び衛生上に甚だ必要なることなれば、今後益々此の空地利用を行はれんことを希望して止ざる所なり。（完）

森林と養蜂（續き）

N生

「乳と蜜との流る、處」と舊約聖書の筆者を「エデンの樂園」を稱へて居る、して見ると人類の元始時代から蜂蜜があつてアダムロヴから子々孫々皆其の甘い味に舌つゝみを打つて來たのであらう

昔「チユウトン民族」には結婚後三十日間新郎新婦は蜜で釀つた酒を飲用して樂しく日を送る習慣があつた是が卽蜜月（ハチムン）の起源である

今日でも蜜を人生享樂の象徴である、此の甘い甘い蜜を吾々に供給して呉れる蜜蜂に就て少しく考察して見たい

蜂蜜は元來野生のものである――總ての家畜家禽の類皆然りであるが――が人が蜜を欲しさに飼育したので今でも少し注意を怠ると群をなして逃走して木のうつろや石の間などへ行つて巣を營み人間の御厄介にならないでも充分に生活し存續して行く、未十分ドメスチケイトしない爲であらうか？

蜜蜂の昆虫學上の所屬は膜翅目蜜蜂科の蜜蜂屬に入るもので

Apis mellifica.
Apis indica
Apis florja
同 d rsata
同 fusiata
同 Adonsonii

等の種類がある

日本在來のものはA Indico で今日日本に普通に飼育せられて居る洋種は主としてAmellifiveである（品種から云へばイタリヤ種、サイプリア種、カーニヲラ種からカシヤ種等）

日本種と云ふけれど上古日本には蜜蜂が居なかつたらしい、皇極天皇の時代に？百濟の太子餘豊といふ人が大和の三輪山へ持參の蜜蜂を放養したのが起りらしい其後千數百年間自然に又は人間に飼養せられて今日に至つたのである

洋種は近年渡來したもので品種の名稱から原産地を知り得やう

今巣の蓋を取去つて彼等蜜蜂の生活狀態を窺つて見やう、其處に彼等の自然の命に畏み從つて活動する元氣の充實した圓滿なる社會――一家團欒の樂しい家庭を見擊することが出來る、蜜蜂の生活を見る時に吾人人間の生活が餘りに自然よりかけはなれ自然に悖つて居ることが悲しく感せられる、淺薄な人間の智慧で自然に打勝つことは出來ない、自然に逆くものは必自然によつて復讐せられる

自然生活團体生活――之は彼等のアルハでありオメカである、自然をはなれ團体をはなれては彼等の生活は無いのである

萬を以て數へられる數の一家族、一工場員が全群一致の行動で一糸みだれず誠意を以て勤勞して居る、何處にサボタージユが行はれ何處にストライキが起らう

「惰る者よ蟻にゆき其の爲す所を見て智慧を得よ」と箴言にあるが茲に「惰る者よ蜜蜂にゆき其の爲す所を見て耻ぢよ」と云ひたい、「我父は今に至る迄働きたまふ我も亦働くなり」耶蘇の言葉を蜜蜂は知つては居まい然し實際に行つて居る

啻に勤勞の点丈ではない家族の相愛、家庭の秩序、自家の愛護、團体の衛生等から考へても蜜蜂は眞に奉仁の生活をして居る、而も其の生活を嬉々として喜こんで居ると云ふ点から見て吾人人間は蜂の前に頭があがるまい

筆が大分わきへそれた、本題に立ちかくら

う

勤勉なる此の蜜蜂は盛に巣を出入して居る何處へ何の爲に行つて來るか？　云ふ迄もなく蜜や花粉をたづねて花から花をあさつて來るのである、前にも云つた通り花は彼等の牧場である、此の花の所有者として森林は重要なる位置を占めて居る今此の蜂に蜜や花粉を與ふる主なる森林植物を表示すれば次の通である

奉季開花するもの

ウメ　薔薇科　アメリカヤマナラシ　楊柳科
スギ　松柏科　仝　楊柳科
マツ　仝　メギ　小蘗科
ハンノキ　樺木科　ヘビノボラズ　仝
ハシバミ　仝　スグリ　虎耳草科
アブラチヤン　樺科　フサスグリ　仝
フキ　菊科　ニレ　楡科
ツバキ　山茶科　モミヂ　戚樹同
クロモジ　樟科　ツツジ　石南同
センダン　楝科　シヤクナゲ　仝
サクラ　薔薇科　トサミズキ　金縫梅科
ヤマモモ　楊梅科　クワリン　薔薇同
スミレ　菫菜科　ノブダウ　葡萄同
モモ　薔薇科　フヂ　菫同
ボケ　仝　キリ　玄參同
シドメ　仝　アブラキリ大戟同
シヲヂ　木犀科　ブナ　山毛欅同
イヌブナ　仝　エゴ　齊墩果同
ミツマタ　仝　ミズキ　山茱萸同
ナシ　薔薇科　カナメモチ　薔薇同
マルメロ　仝　クス　樟科
ズミ　仝　カシ　殼斗科
バラ　仝　カシハ　仝
ドロ　楊柳科　クヌギ　仝
ヤマナラシ　仝

春夏の候開花するもの

キイチゴ　薔薇科　ウツギ　虎耳草科
モチノキ　冬青科　ノリウツギ　仝
カキ　柿樹科　タニウツギ　仝
ウコキ　五加科　ナツグミ　古額子科
クロ　茄科

夏季開花するもの

ナツメ　鼠季科　クリ　殼斗科
クマヤナギ　仝　ムクゲ　錦葵同
クロウメモドキ　仝　ボダイジュ　田麻同
オニグルミ　胡桃科　エレジユ　菫科
サハグルミ　仝　ハリエンジュ　仝
ラウチクルミ　仝　サイカチ　仝
ヒメクルミ　仝　然患子科
ケレボナレ　鼠季科　ムクロジ　胡頽子同
シヒ　殼斗科　グミ　茜草同
イボタ　木犀科　クチナシ　七葉樹同
ナンテン　小蘗同　ツタ　葡萄同
アヲキリ　梧桐同　トロツアフヒ　錦葵同
サカキ　山茶同　フシノキ　漆樹同
サンゴジユ　忍冬同　サルスベリ　千屈菜同
ハゼ　漆樹同　ユリ　百合同
ウルシ　仝

秋季開花するもの

フヂバカマ　菊科　ミツバギ　千屈菜科
ハギ　菫科　チヤ　山茶科
クズ　仝　ササレクワ　仝
ヲミナヘシ　敢醬科

若き日の思ひ出

尾花

うら淋し又うら悲し山里に
わが若き日の過ぐるを思へば
嗚呼!!　こんな歌を作つては一人で悲しんで居たうら若かりし日も何時しか過ぎて早や人生の行路を半ば歩み去らうとして居る

夢の世に夢とも知らず夢を見て
夢より夢にうつる夢の世

といふ歌を何かの本で見た事があつたが實際過ぎ來し方を顧りみれば茫として夢のやうである、その夢とも知らず見し――うら若かりし日の――夢を永き夜の徒然に拙き筆の動くがまゝに書いて見やう

□

私が始めて此處へ赴任したのは母校を卒業したばかりの若い希望に燃えて居た十八の春だつた

永い年月暖かい土の中にはぐくまれて居た私も水分とぬくもりのために漸く芽ぐんで陽の光を受くるやうになつたと思ふ間もなく浮世の風にさらされるのかと思ふと何だか社會に出るのが恐ろしくて何時迄も何時迄も柔らかい土の中にかゞんで居たい樣な氣がした

然しこれからは自分で自分が養つて行けるのかと思ふと何だか嬉しくて一日も早く木曾の天地を飛び出して力の限り根を出し莖を伸ばして社會に雄飛したい樣な氣もする兎に角うんな考を抱いて母校を卒業した

□

かはゆ子を一人殘して野良かせぎ
する父親も一人なりけり

母親の無い親一人子一人の家庭程氣の毒なものはない、然し遊びに行く所とはてない山の中で孤獨の生活を續けてる程悲しくも又うら淋しい事は他にあるまい

小さい乍らも住み慣れた木曾の都を後にしてこの山中に赴任した時には急に世間が狹くなつた樣な氣がして悲しくて悲しくて本當に泣きたいやうだつた

夜となく晝となく故郷の事のみ思はれて雨の降る夜などは特に淋しさに堪へ兼ね山から逃出したかつた

然し周圍の人々は私を可愛がつて呉れるし人夫達も思つたよりは親切なので日を經るに從つて親じみを感じ自分の職務にもだん〳〵趣味を持つやうになつた

□

谷々は瀧のひびきにとどろきて
風に音なき木谷奥山

山口縣には珍らしい雜木の生ひ茂つた山で到る所に美しい瀧が懸つて居る

特に秋の紅葉と春の山櫻とはたまらなくい、、然し四方の草木はうら枯れて痛せ細りし木々に寒風のすさぶ頃になると妙に白粉くさい巷の灯が戀しくなる

然しうれさへもまゝならぬ私には唯すきな本でも讀んで正月の休暇を待つて居るより外仕方がない、實際夏と冬の休暇がどれだけ私には待ち遠しかつたか――……否休暇の近寄る度に如何程血湧き肉おどつたか知れぬ

兎も角うんな工合で三ケ年過ぎた、とある日私と同じやうに山の中に住んで居る友人から次の樣な手紙が來た

K君御手紙有り難ふ、僕は何だか君に逢ひたくてならぬ、然し君も隨分永く其處につとめてるな――もう足掛け三年になるじやないか、何か面白い事でもあるのかい

實際酒も飲まず芝居も見ずに山の中ばかりにかゞんで居るには其處に何かの理由がなくてはならぬ金？　戀？

僕は今その何れをも持たない、それで自然心の淋しさに若しんで居る、今も君の寫眞を眺めて……云々と

實際よく考へて見れば私共は金か戀かその何れかのためにこんな山の中にでも生活し得られるのかも知れぬ

然しそれも一概には言へぬけれど……

（つづく）

× × × × × × × ×

金華山に登りて

岐阜　T　O　生

芭蕉歌ひし城跡や
古井の泉水おとのへば
三百歳の星霜を
苔蒸し昔名殘るかな

□

更に天守の高臺に
登りて見れば天儉に
たのむ甲斐なく武士の
失意の涙いかなりし

□

其長涙は今も尙
城訪ふ人の袖のへに
木梢の雫うるほして
廻想いとどものあはれ

□

悠久たへぬ天地（あめつち）は
有情無情のけじめなく
一爐に入れてとけ行くを
幾世變らぬ常ならめ

□

されぞ見よや松柏の
色も霜には移らふを
いかで生あり情に泣く
人や涙のなからなん

（一〇、一、一九）

紅玉の悲しみ

ダブル、エス

勝ちゐたる其冠の紅玉は憂ふくみて
かがやけるかな
迷ひうる其人々はすくはるも得ぬ人々の
いかに悲しき
迷ひたる羊の群は綠なすのべの草をも
紙もはみたり
めぐまれし其肉片を怪しげにかぎまわりた
る犬のかたりし
彼の友は身體に合はぬ古ベット投げいだし
つゝ、遂にめざめぬ
其弟子に裏切られたる其罪は誰にあるべき
老ベスタロッチ
白駒のはざまよぎるをいらいらと誰ながめ
つゝ、其日送りぬ
永久に熱き血しをのひゆるなと祈りうるも
の幸か不幸か
死を思ふは生きんが爲ぞ永久に生きんが爲
に死を思ふなり
時折は友が肉をもきり取りてうえし人はも
生きて行くなる
或時は蛇にも似たる心もて唯憎しみぬ
生きゆく人を
かにかくに人は皆よし事毎に爭ふことの
わづらはしきよ
交りて荒れし心を唯一人悲しみつゝ、も
かえりみるかな
追憶の林にあえる人は佳くわけても美し

君がかんばせ
と懷かしの友が熱き唇にキスしてみたき
心地はもする
道にあひうつむき行ける彼の人赤きほゝこ
そ美しかりし
夫よりはハートに射られし其矢をば抜きえ
もやらで唯悲しめり
みつめぬし赤き燄は彼の人の姿となりて
我が身體やく
傷つける胸を抱きて夜も晝も黄なる日のも
とさまよひにけり
流れ行く時が二人を堰しより彼は路傍の
花となりけり
紫のダリアの花も白百合も今は何せむ
あきらめし我

學校通信

本校にも修養團員次第に增加を見遂に支部設立せられ中村教諭を支部長に仰ぐに至り毎日國民体操に熱心發展に務む

一月廿九日　松本先生東京修養團本部より來校講演あり
二月十日　寄宿舍修養團生徒除雪を行ふ
二月十一日　本校武道寒稽古を終了す
紀元節拜賀式擧行
式後武道大會開催來賓多數近年に無き盛會を極めたり

會員異動

○林　森君　長野小林區轉勤
○佐藤光造君　山梨縣廳山林課に轉任
○川崎本雄君　東京府荏原郡大井町字瀧王子四四〇三番地に轉住
○廣瀨運平君　今回螢雪の功現はれて齒科醫學學說試驗合格せられ尙實地研究の爲東洋齒科醫學專門學校にて研鑽中東京市京橋區八丁堀仲町一の吉岡方に在住
○山下藤一君　東京四谷區南町十八番地に轉住
○征矢三郎君　江原道伊川郡伊川邑住友林業課詰所に轉職
○星　重男君　岐阜縣帝林局高山町出張所に轉任
○今井健治君　名古屋市外愛知町字米野に在住
○宮澤末雄君　東京大林區に出勤

◎急　告

第十三回卒業以前のお方で林友代不足未納のお方が澤山御座います爲に雜誌部では約五百圓といふ大きな借財になつて居ります此の儘でいつたらやがて滅亡といふ時が來る事と信じます、られ故林友代不足のお方は大至急御送金下さる樣切にお願して置きます

長野縣木曾山林學校入學者のために

一、募集人員
第一學年約九十名
一、入學資格
年齡十四才以上身体强健志想確實ニシテ左ノ資格ヲ有スルモノ
(イ)高等小學第二學年以上ノ課程ヲ修了シタルモノ
(ロ)高等小學第二學年ヲ修了セザルモ同二年程度ニ依ル國語算術及理科ノ學力試驗ニ合格シタルモノ
(ハ)尋常小學校卒業ノ學力ヲ入學程度トスル修業年限三ケ年ノ實業學校ヲ卒業シタルモノ及ビ之ニ準スベキモノ
(ニ)中學第二學年以上ノ課程ヲ修了シタルモノ
一、入學試驗
志願者募集人員ニ超過スル時ハ高等小學第二學年修了程度ノ國語算術及理科ノ試驗ヲ行フ
一、入學試驗ノ場所
木曾山林學校
但シ西筑摩郡以外ノ志願者ノ試驗場所ハ附近郡役所ニ依賴スル見込ミ
(確定ノ上ハ通知ス)
一、入學試驗ノ期日
四月一日
一、入學許可ト入學式
入學許可及入學式ノ期日ハ夫々通知スベシ入學式ノ時ハ父兄又ハ保證人同道シ出校スルコト入學式ニ欠席シタルモノハ入學ヲ取消スベシ
一、入學ノ手續
入學志願者ハ當校長宛ニ三月二十五日限リ入學願書ニ履歷書、在學證明書、身体檢査書、戸籍謄本ヲ添ヘ差出スベシ(戸籍謄本ハ入學後ニテ差支ナシ)
入學願書履歷書在學證明書ノ樣式ハ左ノ通

(一)　入學願書　(用紙美濃紙)

御校第(何)學年ヘ入學志願ニ付御許可被成下度履歷書身体檢査書及戸籍謄本相添ヘ此段願上候也
何府(縣)何郡(市)町(村)何番地居住
(寄留ナレバ寄留地モ記入スベシ)
誰子(弟)等　職業
何府(縣)華(士)族(平民)
入學志願者　何　某　㊞
同　上
同　上
右父(兄)(後見人)　何　某　㊞
長野縣木曾山林學校長岡部喜平殿

(二)　履歸書

何府(縣)何郡何村番地族稱誰子(弟)
本籍　何府(縣)何郡(市)町(村)何番地居住
(戸主)寄留地何府(縣)何郡何村番地

何　某　㊞
生年月日
學業

一、何年何月何校ニ於テ何科何學年ノ教科ヲ修業若シクハ卒業
一、何年何月ヨリ何年何月マデ何處何某ニ就キ何學修業等
賞罰
一、何年何月何處ニ於テ何事ニ付賞若シクハ罰ヲ受ケシ等
右之通リ相違無之候也
年　月　日
(三)　成績證明書
大正何年何月卒業(又ハ見込ノ者)

卒業又ハ最近ノ評点	
何	
何	
何	
何	
何	
何	
何	
平均点	
品行	
成績順位	
体質	强中弱
其他ノ參考事項	

右之通リ候也
何縣何郡何村
何々學校長　氏　名　㊞

一、寄宿舍
本校生徒ハ訓育及實習上ヨリ寄宿舍ニ收容スルヲ本体トス左ノ場合ニ限リ通學ヲ許スコトアルベシ
一、本校附近在住ノ者

一、本校附近在住親戚又ハ確實ナル知己ヨリ通學セントスルモノ
一、其ノ他特別ノ事情アルモノ
一、在學者ノ入費調（宿宿舍ニ就キテノ調）

費目	學年	第一學年	第二學年	第三學年
經常費	授業料	二四、〇〇〇円	仝上	仝上
	食費	一四〇、〇〇〇	仝上	仝上
	舍費	一二、〇〇〇	仝上	仝上
	校友會費	四、八〇〇	仝上	仝上
	旅行費	五、〇〇〇	二〇円〇〇〇	二〇円〇〇〇
	雜費	八九、〇〇〇	仝上	仝上
	合計	二七四円八〇〇	二八九円八〇〇	二九九円八〇〇
臨時費	教科書	一二、〇〇〇	一四、〇〇〇	一〇、〇〇〇
	夏服（小倉）	六、〇〇〇	一	一
	帽子	二、五〇〇	一	一
	實習服	五、〇〇〇	一	一
	鉈鎌代	二、〇〇〇	一	一
	冬服（小倉）	一〇、〇〇〇	一	一
	ゲートル	一、五〇〇	一	一
	短靴	六、〇〇〇	一	一
	文具其他	一二、〇〇〇	一二、〇〇〇	一二、〇〇〇
	合計	五七、〇〇〇	二六、〇〇〇	二二、〇〇〇
總計		三三一円八〇〇	三一九円八〇〇	三二一円八〇〇

入學のすゝめ

當校は明治三十四年の創立で可なり古い學校でありますが、山林學校の名稱は余り聞き慣れぬ名稱で全國に當校一つであります から林業界以外の人々はどんな學校か知らない人が多い樣です

當校は高等小學卒業程度を入學資格とし修業年限は三ケ年です山林學校であるから林業の事しか敎へないと御考へになるど、それは大間違ひです當校の學科目は修身國語英語數學（代數幾何三角）物理化學博物法制經濟体操等の普通學科と測量造林利用測樹經理等の林業に關する林學科と農學大意とです毎週の授業時間は三十時間で此の外に實習を課します、當校は實習に重きを置き平常學科授業後に之を課する外に、春季夏季秋季に定期の終日實習を課します、毎週三十時間の授業時間の中で普通學を敎へる時代が第一學年は二十四時間、第二學年は十五時間、第三學年は十三時間ですから普通學課を敎へる時間の方が多く當校を卒業すれば林業農業に關する技術を修得し得るのみならず高等の普通敎育も併せて受くる事が出來るのです

申す迄もなく徴兵令文官令に依る中學科程度と同等以上と認定されて居る學校です

當校の卒業生は五百名以上でありますが其中約三百名は山林局帝室林野管理局林區署地方廳及殖民地の諸官署に奉職し約百名は民間の會社其の他の林業に從事し鄕里に歸りて家業に從事して居るものは七八十名位です大正九年三月の全國農業學校の農學科卒業生は二五八一人で其の中就職せるもの六七四人其の他は盡く家業に從事して居るとの事ですが當校は大いに之と趣を異にして居ります當校の卒業生は內地殖民地到る處に居いて盛に活動して居りますから林業界では當校の眞價がよく認められ卒業生の需要も多い方で昨年は五十名の卒業生に對し二倍以上の申込があり大抵三五——四五圓位の俸給で就職して居ますそれに實地の事業に臨む場合は旅費手當がありますから月七八十圓の取入はある樣です

實業學校の中でも當校はかく就職の便宜が多い爲めか能く學校の事情を知つて居る本縣や隣りの岐阜縣等からは入學志願者が多いですが近年は却て全國各地で當校卒業生の活動して居るのを見て他府縣からの志望者が增加する傾向があります

林業は所謂百年の長計で至つて迂遠の仕事であるし又大面積の山林を所有するでなければ年が年中專業として經營する程の仕事がありませんから國家とか町村とか富豪とか云ふ者でなければ專門に經營する事が困難である當校の卒業生が官廳や會社に雇はれ林業技術員となり自己經營をする者がないのは已むを得ぬ事でありますが長野縣の

如き山林國で當校の卒業生が自己の鄕里に歸り町村の林業發展に盡力する者の少ないのは遺憾の極みであります近年中等敎育を受けんとする青年が非常に增加し中等學校の如き入學試驗の競爭激烈で學校も父兄も其の弊に苦しんで居るのですがかくして卒業したものがどうなるかと云ふと六七分は鄕里に歸り家事に從事するならば山林多き地方の農村の子弟の如きは當校の學校に入學し卒業後は農業林業を營み又居村の山林改善に盡力する方が自己の爲であり町村の爲めであり又國家の爲でもあると考へます當校に於ても中等階級の國民として立つに必要なる高等普通敎育は受けられます殊に及有林野の多き町村杯では之を立派に經營するには林業敎育を受けた人が一生其の土地に土着して中心となつて働かなければ駄目であります自ら進んで林業敎育を受け土着して居村の林業に盡力して見たいと云ふ樣な青年のない村では村費で著實の青年を選んで當校へ入學せしむる樣にして戴きたいと思ひます折角縣費で山林學校を設げて之を縣林業の發展に利用せぬのは殘念至極のとです

大正十年一月

廿週年紀念士意書

拜啓日下益々御淸祥の段奉賀候陣者我木曾山林學校も明治三十四年四月創立以來健全なる生長を遂げ本年を以て二十週年を迎へ今や天下の山林學校たる榮運を見るに至も候に就きては此の時を機とし既往の光輝ある歷史を記念すると共に大に校運の發展を圖るため左記記念事業企畫致し度と存じ候につき御援助蒙り度記念事業としては種々御考案もあらせらるゝ事と存じ候へ共六百の校友の事業としては遺憾ながら多額の資金を要する計畫は成立困難と認め母校の現狀に鑑み左の通り決定致せし次第に御座候之とて一時に完成を計らんとするには容易ならざることにつき校友諸士の愛校の至誠に訴へ御奮發を御願ひ致し漸を以て完成を期する樣致し度見込みに御座候間右御賛成の榮を賜り度此段得貴意候

大正十年二月　敬具

記

一、記念標本室創設
一、記念圖書室創設
一、林友記念號發刊

右の外有志の出金に依り記念祝賀會を催し又舊職員に何等かの形式を以て謝恩の意を表する見込み

追而

一人の御出金額は二圓以上とし成るべく は各自に收一割位の御奮發を御願申度御出金申込期は大正十年四月三十日限り御出金は大正十年十月三十一日限りとし十圓以上の御申込者は大正十一年十月卅一日迄に數回に御出金相成るも差支無之候

左の諸氏を實行委員に擧げ記念會の事務は校友會長及委員に一任することに御承諾相願候

西澤靜入　中村三郎　菊地一
田中隆壽　三溝菅之　樋口德一
久保田傳一郎　西尾嘉一　宮下信一
藏尾眞

御送金は木曾山林學校內創立二十週年記念會委員西澤靜人【振替口座名古屋三五五五番】宛に御願申候受領證は別に差上げず林友誌上にて發表可致候

長野縣木曾山林學校創立
二十週年紀念會發起人
（イロハ順）

市川潔　西澤靜人
岩久宗治　西尾嘉一
原田義治　千村重喜
原四郎　于田政美
蜂須賀宮次郎　千村彌之助
原雛助　岡部喜平
原耕民　岡田恒治
長谷川義男　岡戸廣治
長谷川潔　尾重潔

乙谷耕吉　高野金作　野智里慶勛　小池新吾　藤原忠治
小山田喜十郎　高柴眞次郎　久保田傳一郎　小池金三郎　下條初太郎
奥原吉佐衛門　高野董見　倉科浦一郎　小林秀一　勅使原角藏
岡西謙三　園原咲也　倉澤辰雄　遠藤宗作　肥田幸一郎
輪湖正由　塚越赳夫　藏尾眞　遠藤治一郎
鷲澤忠治　坪倉藤三郎　山下常記　寺島正治
和田宗吉　辻敬二　矢島駒二　安藤眞佐吉
勝野慶次郎　中村三郎　山村次一　新井喜多雄
加藤純一　中村豐治　象高甚一　芦澤庸三
川岸滋次郎　永井順　前野慶一　三溝菅之
嶽野利雄　仲俣吾市　松飼藤太郎　齊藤正雄
川崎本雄　中島要人　松島九平　佐竹兵治
上條嘉一郎　仲田惠令　松澤莊太郎　南村末吉
金井澄水　仲田辰雄　前田正義　宮下眞一
金田美行　中澤楊　丸山久雄　宮城忠藏
吉田兵太　村上安太郎　福田友次郎　菊池一
由尾忠輔　鵜飼政義　福井利吉　木村音次郎
米山修　宇佐眞周柴　藤卷壽一　北川倍美
田中隆壽　上田鉦二　小貫堅造　木村康明
但馬廣造　臼井辰雄　小松精內　喜多村明

廣瀨靜之進
平田稻男
樋口德一
杉本貢

大正十年二月廿三日印刷
大正十年二月廿五日發行

長崎縣西筑摩郡福島町四〇四番地
編輯發行人　安井正夫
長野縣西筑摩郡福嶋町三八九番地
發行所　蘆澤書店

長野縣松本市小柳町八十五番地
印刷人　淺川吉藏
長野縣松本市小柳町八十五番地
印刷所　淺川活版所

【定價金參錢】